



三原市老人大学 ふれあい

第97号
発行・編集
三原市老人大学
ふれあい新聞
編集委員会
電話 64-6868

アンケートを活かして新老を

学長 植木 章弘

三原市老人大学は、駅前に移転することになりました。これを機に、より素晴らしい学びの場とするために、学生のみならずの意見を頂くアンケートを実施いたしました。結果は次のとおりです。ご協力ありがとうございました。

一、駐車場確保が最大の課題

全体の半数を越える方が、自家用車を利用。60代、70代はさらに高い。駅前の新駐車場は他施設との調整があるとしても、駐車場確保に最大限努力しなければならぬ。

二、新鮮な講座の開設要望

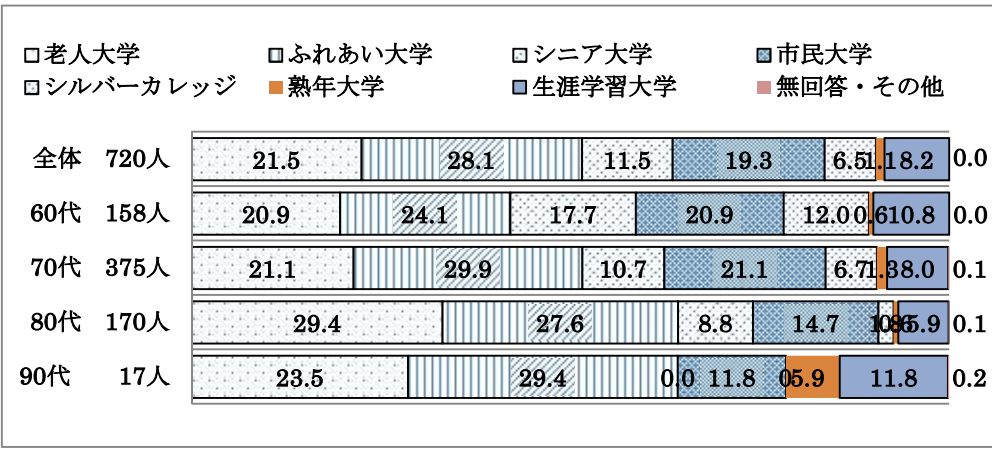
これまでの伝統の講座に合わせて、各世代共通に時代のニーズに合う新講座開設の要望。このことから事務局は、県立大の協力もあり新講座開設に向けて、現在体験講座を各種実施中。

三、新老大の名称の検討協議

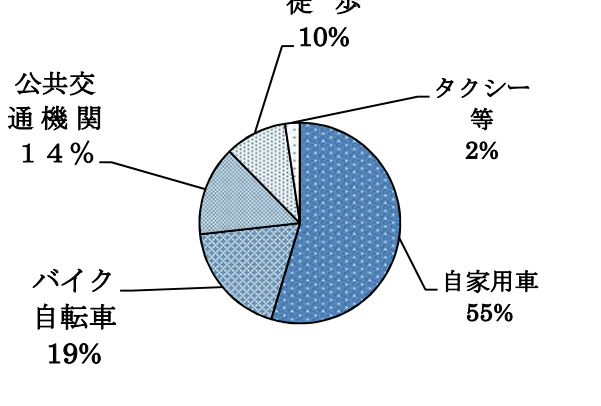
名称については、世代間で大きい格差。80代、90代は「老大」への愛着が三割、70代は二割、60代は一割。ここ数年來、各方面から大学の名称について様々なご意見あり。老大の歴史と伝統を大事にしながら、時代の変化に応じた将来に生きる名

称の検討をしたい。名称は三原市の条例事項であり、今後生涯学習課と協議の予定。

三原市老人大学は、これまで一貫して高齢者の生涯学習に取り組んできました。この伝統と絆を基本としながら、時代の変化に対応したより素晴らしい学びの場となるよう努めていくつもりです。



通学方法



旅の思い出

パソコン院⑧ 廣勢 一三

今から40年程前になるが、横浜に赴任して半年過ぎた2月、ある業者から「冬の閑な時期に、社内旅行をするが参加しないかと誘いを受けた。初めて関東に来た私は、すぐにOKの返事をした。

それからは、事務所の片隅で打ち合わせをする幹事の声になるようになった。その話の中に「サロンバスで行こう」と言う言葉が出てきた。初めて聞く言葉であるが、どんなバスか見当はつく。

当日、バスに乗ると「お客さんはこちらです」と、一番前の席を指定された。後部にはテーブルがあり、ビールや酒やつまみが置いてある。それを10人くらいが囲んで談笑している。

発車後、間もなくして挨拶を求められた。その時に事務所です聞いた「サロンバス」を思い出



榛名山 (別名榛名富士=標高 1390.3m) と結氷した榛名湖

ことができず遠くを眺めている

し、「最初サロンバスと聞いた時、私は田舎者だから何も分からず『貼ってよく効くサロンパスのことかな』テレビコマーシャル」と思いました」と言って一笑させたことがある。

目的地の伊香保温泉に到着し一服して榛名湖へ行くと「この寒いのに何故湖だ」と思いつきながらバスに乗り込んだ。榛名湖に着いてびっくりした。湖面が一面氷である。ワカサギ釣りをする人、スケートを楽しむ人、氷の上を遊ぶ子供もいる。私も氷の上、いや、湖の上に立つてみた。冬の榛名山(榛名富士)は実に綺麗だ。雪国の冬は寒くて何もできないと思っていたが、雪国は雪があるから楽しいのだと思いついて遠くに見える山々をしばし眺めていた。一緒に行った中の数人がスケートを借りていたが、気持ちよく滑る人、よちよち歩きの人、動く

人、さまざまである。

夜はお馴染みの宴会である。歌の上手い人が2・3人いて、それを聞きながら飲み、談笑して楽しいひと時を過ごした。朝風呂につかり、朝食に行く

と、テーブルの上にビールが並んでいる、「迎え酒」とばかりグラスを傾ける。お陰で、帰りの車窓からの景色は一向に記憶にない。気が付いたら横浜である。バスから降りると4・5人で反省会をやったが、帰りの話は誰からも出てこなかった。

三原弁

パソコン院⑬ 中本 民江

私はあるサークルで、来年のカレンダー作りの担当です。最初にテーマを決めます。今年のテーマが三原弁でした。これが皆さんに好評であったため、来年も三原弁IIに決まりました。私は愛媛県生まれなので、三原弁はあまり知りません。

三原弁の話し合いの時は、あくでもない、こうでもないから次へとでてきて、賑やかで、笑いあり、盛り上がりました。次に言葉の編集です。その中の一部を紹介します。

・じゃんけんのかげ声で、あいいこの時に「じゃんけんぽんあいいこでしよ、じっしんけん、ヨローロッパ、しつこいね」を繰り返す。

・ギザミをぎょうさん釣って、しごう、しとるけん、食べんシヤー

・「神明さんで、日本一のダルマが上がつとるけ、見にきやんした」「また来年きやんしよ」
 ・「うちは、髪の毛がおゆるて、手入れをせんけん、おおがつそになるんよ」

皆さん如何ですか？思いはそれぞれですが、何か親しみや、懐かしさを感じませんか？私も三原に三十年近く暮らしているので、知らないうちに三原弁で話しているかもしれせん。

大分県の双耳峰「由布岳」

パソコソ院⑬ 下見 若行

「憧れの山へー」
 いつか登ってみたいと思う山が大分県に有り「由布岳」といいます。

9月16日この山に登ってきました。

15日は登山に都合のよいホテルを予約して、この日はあれこれと見学をいたしました。が紙面の都合もあり省略します。

16日は、昨夜の暮れから曇り、雨がちらついていました。お天気はあまりよくありません。

当初、日の出を山頂で迎えるべく、2時50分正面登山口出発としていたが、予定を遅らせて3時ホテルを出発しました。雨上がりの登山道は草も濡れて快適とは言えません。

中央登山口から合野越まで約50分、ここまでは順調でした。合野越から20分も登った辺りで、登山道が判らなくなり、後ろから来ていた人達も、姿を消してしまいで道に迷ってしまったのです。

引き返す道を探して林の中を彷徨っていたとき、3匹の鹿に遭遇しました。登り口で鹿は見えていたが、暗闇の中で鹿の目がヘッドランプに照らされて2つずつ3箇所も見えるのです。そしてチェイーンと鹿の鳴く声、警戒しているのでしょうか。自分の目で暗闇の中で光る鹿の目を見、そして鳴き声を聞いたのは初めてでした。

15分も降りた所でやっと登山道を見つけて一安心。おくれること30分余り、それからマタエという由布岳の外輪山に到着したのは、6時50分過ぎでした。予定より遅れること1時間40分、それでも、外輪山まで来ました。ここで少し休憩です。マタエから西峰頂上まではガイドブックにより違いはありますが約15分〜20分。私達は上り40分下り30分くらいを予定し往復1時間10分。

ここから鎖を使って登るロッククライミングもある山登りです。写真の鎖場は由布岳(2583m)のカニの横ばいや、縦ばいといわれている場所です。

私の経験した剣岳(2999m)でのカニの横ばい、縦ばいは記憶に残る難所でした。



横ばい縦ばいを何とか登りきり、由布岳西峰頂上に立つことが出来ました。到着7時40分でした。

マタエから40分余り掛かった計算です。標準タイムに+αして予定した時間通りではありませんが年齢による足腰の衰えと平衡感覚の鈍りを痛感しています。

西峰からお鉢周りもあります。マタエに引き返す道を選択し、東峰へ回りました。

東峰は西峰に比べ初心者でも登れるらしく高松からの山の会の一に行に会い、山の話で盛り上がりました。「西峰へは」と聞くと「初心者は駄目なので登りません」との返事でした。

東峰を9時に出て、外輪山の一角、剣ノ峰を通り、東登山口コースを下山開始です。

この道も岩場を鎖とロープで下る険しい道でした。東登山口と国有林入口からの交差点、日向越まで2時間を掛けて辿り着きました。

家族連れの一行と会い、下山道について判り易い道を尋ねました。「この道なら迷うことはないだろう」と教えていただいた日向岳観察路、下草は綺麗に刈り取られ家族連れの憩いの場所として整備は行き届いていました。登山者にとつては下山道

が分かりにくい。樹の幹に赤いテープを巻いてあったり、岩に黄色のペンキで印があったり、はたまた、三途の河原の石積みのように石を積み重ねてあったり、目印まで行つては立ち止まり次の印を探す。下っているからついで下を探すが、随分上に印

があったり、すぐに見つかればいいが、登ったり下つたりの登山道では、右・左・上また下を確認し、「あつたあつた」と印を辿り、時間の掛かること、やつとの思いで国有林入り口まで2時間を掛けて下山しました。

東峰を出発して4時間、大変な道程でした。続きもありますが無事に下山できたことを報告して、めでたしめでたしと致します。

スマートフォン

パソコソ院⑬ 金丸 春枝

「母さんが、携帯持っていないと不便よ」と、息子に言われ、携帯電話を持ち始めたのが15年ほど前。以後、手軽で便利な物として重宝していた。スマホが流行りだしても、自分はこれで良いと思っていた。が、気付けば周囲は高齢者もスマホだらけ。ガラケーと言われる物を出すのがチョット気恥ずかしいな、と感じるようになり、3年ほど前にスマホに変更した。2年契約後更新という物の筈だったが、2年を3ヶ月待たずして、メール、ラインが使用できなくなってしまった。

聞けば、本体容量の少ない機種だったらしい。店員さんの勧められるまま、購入したのは自分の勉強不足と反省し、以前のものより数倍容量の大きい機種に変更した。慣れてくると、パソコンよりも素早く出来るスマホのネットの方が便利になってきた。最近テレビで、下重暁子

さんが話している番組をみて、無気力気味になってきている自分に気づき(フィットネスジムと老犬、時々ランチ)何か新しい事、楽しく出来る事をと、先ず読書から、続いて、クラフトバンドで作るバッグ、果物籠を始めた。そこでスマホが活躍する。読書では、作者のこと、作品のことクラフトバンドでは、作り方の数々、中でも花ボタンの作り方の動画はとても丁寧な教えてくれた。気付けば続けざまに十作品になつていた。クラフトバンドは、完成品を日ごろ関わっている身近な人に心ばかりの感謝を、と受け取ってもらう。



本は、東野圭吾さんが多く、読み始めると夜中になったり、読み終えると余韻に浸り、次の物を読みたくなる。

スマホは、今ではいつもそばにある便利なもの(まだまだ充分使いこなせてはいないが)になつている。

これからも「いい加減」に、楽しみながら傍に置いておきたいものである。

編集後記

新元号に変わって、今年も残すところ、ひと月となりました。ご協力くださった皆様、有難うございました。

今回は院⑬が担当しました。